

4	学習・教育目標に対する学生自身による達成度の継続的な点検や、授業等での学生の理解を助け、勉学意欲を増進し、学生の要望にも対応できる仕組みの構築、学生および教員への仕組みの周知、およびその仕組みに従った活動の実施に努めていること。	S	根拠 <ul style="list-style-type: none"> 完全クオータ制でクオータごとに成績を確認できるのは良い 一年次第一クオータ後に担任面談を実施するのも良い 各学生の到達度がwebアプリでグラフ表示なども用いて確認できるのは優れた取り組みである
---	--	---	--

基準4：教育組織

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	事業関連カリキュラムを適切な教育方法によって展開し、教育成果をあげる能力をもった十分な数の教員と、産業界等との協働による事業支援体制が存在していること。	S	根拠 <ul style="list-style-type: none"> 12名の専任教員に加えて多くの非常勤講師も参画している 専任12人のうち6人が博士であり経営者経験者もあり十分な質量の構成となっている 実務家教員の出身業界が多様であることも良い
2	事業関連カリキュラムに設定された科目間の連携を密にし、教育効果を上げ、改善するための教員間連絡ネットワーク組織があり、それらに従って活動を実施し、有効に機能していること。	S	根拠 <ul style="list-style-type: none"> 定例会議で定期的に情報共有されており機能している 教員研修(FD)も有効に機能している

基準5：学習・教育目標の達成

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	事業に関わる学生に学習・教育目標を達成させるために、修了認定の基準と方法が適切に定められ、当該専攻にかかわる学生および教員に開示していること。またそれに従って修了認定を実施していること。	S	根拠 <ul style="list-style-type: none"> 修了認定は基準と方法は明確に学則として規程整備されており、運用も書実に行われている 指摘事項 <ul style="list-style-type: none"> ディプロマポリシーの制定については今後の課題と考える

基準6：教育改善

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	点検・評価システムは、社会の要求や学生の要望に配慮する仕	S	根拠 出所など：日本技術者教育認定機構「専門職大学院認定評価報告書」を編集、抜粋して作成

	<p>組みを含み、また、点検・評価システム自体の機能も点検できるものである。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学内の評価、外部評価とも継続的かつ適切に実施されている ・ 実証授業、試行運用、他機関との連携による実証など外部の視点の取り込みも十分に対応されている ・ 学生からは授業アンケートに加えて専用のアンケートも実施して意見を汲み上げている <p>指摘事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生については修了後のフォローアップやそれに基づく人材育成方法の効果検証を実施することは今後の課題と考える
--	--	---

基準 7：事業計画の進捗

番号	評価項目	評価	根拠・指摘事項
1	平成 28 年度の活動目標は当該年度中の成果実績として達成されている	S	<p>根拠</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事業の継続が決定されており高く評価できる ・ 参加学生数は、昨年度 10 名、本年度 9 名（見込み）と十分な数を集めており、実績として十分である ・ ベンチャー設立や事業会社でのプロジェクトの予定があるなど、具体的な成果にも結び付いてきている点は評価できる ・ FD もケースメソッド研修など本格的で有効な取組みがなされている ・ 学生データベースを整備して、入学時の希望、修了時の状況など把握することができつつあり、今後の卒業生フォローにも使える可能性がある点は良い <p>指摘事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ この素晴らしい取り組みをさらに社会に認知させ多くの人材を輩出していくために、企業への働きかけをさらに強化し、企業派遣を増やす努力に期待したい ・ 今後は起業にさらに力を入れても良いのではないかと、そのために継続学習の第 3 段階に、大学としてのベンチャー支援の具体策を明記していくことも有効ではないかと（インキュベーションオフィスの提供、産業技術大学院大学支援ベンチャー称号の付与、大学主催イベントでの

出所など：日本技術者教育認定機構「専門職大学院認証評価報告書」を編集、抜粋して作成

			<p>企業紹介の機会提供、学内フアエンド構築、メンター制度、ビジネスプランコンテストなど)</p> <p>・ PBL は、成果はもとより問題解決手法などのメソッド、チーム編成、プロセスについても討議し学生にさらに気づきを提供してほしい。</p>
--	--	--	--

出所など：日本技術者教育認定機構「専門職大学院認証評価報告書」を編集、抜粋して作成

4 次年度以降の計画

4.1 外部評価結果の指摘事項

平成 28 年度外部評価報告書においては、以下の点が指摘事項として掲載されている。

基準 1: 事業の目的・意義および学習・教育目標の設定と公開

- 貴学が主催することによる強み、例えば IT とデザインシンキングによるビジネスモデル創出などをもっと前面に押し出した遡及があればさらに良い。
- 学習・教育目標は、「ディプロマポリシー」の形で記述することがより望ましい。そのうえでアドミッションポリシーとの整合性を図りつつ、カリキュラムポリシーも制定するとより良い形になるのではないか(全学ではアドミッションポリシーのみ確認できる)。社会の要請は時とともに変化するので、それを汲み上げ反映させるプロセスが明確になっているさらに良い。

基準 2: 学生受け入れ方法

- 専攻のアドミッションポリシーとの整合性を検討されたい。情報アーキテクチャ専攻のポリシーには「ビジネス価値」の記述があり、問題ないが、創造技術専攻にはビジネスの視点がないので今後の課題と考える。
- 成績以外にも起業家マインドなどを考慮する仕組みもあっても良いかもしれない。

基準 3: 教育方法

- 単位の実質化との関係で、各講義回の予復習の内容などを明記する必要性については今後の課題と考える。

基準 5: 学習・教育目標の達成

- ディプロマポリシーの制定については今後の課題と考える。

基準 6: 教育改善

- 学生については修了後のフォローアップやそれに基づく人材育成方法の効果検証を実施することは今後の課題と考える。

基準 7: 事業計画の進捗

- この素晴らしい取り組みをさらに社会に認知させ多くの人材を輩出するために、企業への